洞天福地に関する蕉城の専門家建議

2019年6月22日から23日にかけて、中国の寧徳・蕉城で「第一回洞天福地の研究と保護に関する国際学術会議」が開催された。討論の内容は、個別の洞天福地の歴史研究、フィールド調査、歴史モデル、山水画、景観と園林、墓葬の考古学、儀礼と象徴、聖地巡礼、人と自然の関係、文化遺産としての潜在的な価値および比較研究などにわたる。さらに霍童山へのフィールド調査をおこない、議論の結果、つぎのような認識に至った。
「洞天福地」(Chinese Nature Sanctuary-CNS)は、中国の固有文化の重要な組成要素——道文化の中心的な内容を体系的にそなえている。この文化は、東アジアに大きな影響をあたえており、人と自然の共生という中華文明の精神をあらわしている。洞天福地を世界遺産に申請することは、世界にむけて「中国をものがたる」重要なプロジェクトであって、研究と実践における意義がきわめて高い。

洞天福地は人と自然の融合を実現する聖地であり、自然環境保護区でもある。これによって形成された日常生活のスタイルは、現在にいたってもまだ強い生命力を持っている。その背後に含まれた物質文化および人と自然の関係は、東アジアの伝統文化全体に影響しており、現今の環境保護やエコロジー問題、文化と社会の発展などに示唆をあたえる意義をそなえており、洞天福地の世界文化遺産申請や、いわゆる「五位一体」の発展戦略、人類の運命共同体の建設などに、中国が作用をおよぼす必要性をそなえている。

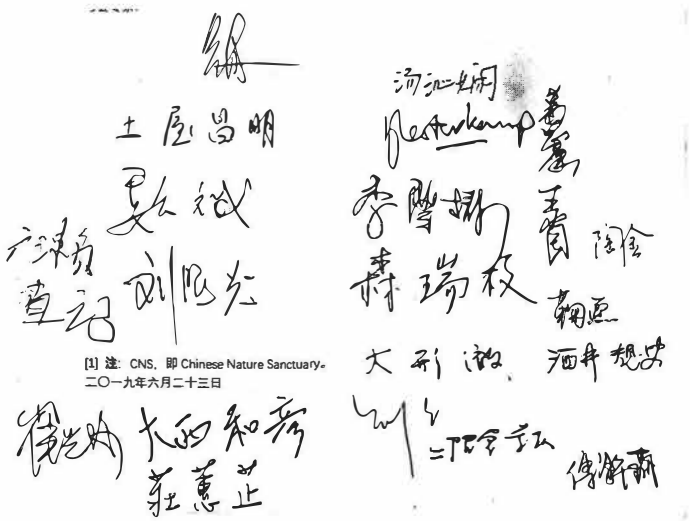
福建省寧徳区蕉城区の管轄内の霍童山は独特の自然環境であり、動物の多様性も豊かで、その植生といい、峡谷や滝などの自然景観といい、卓越したものがある。早くも魏晋時期に、霍童山は「第六大洞天赤城山洞」とされ、さらにのちには「第一小洞天」とされた。葛洪、陶弘景、司馬承禎らの高道がここで修行した足跡を残している。唐代以来、仏教も霍童山に大きな流れを伝え、皇室寺院として支提寺には明代宮廷御用の重要文物が保存されている。このため、洞天福地の一つとしての霍童山は、道教だけでなく、仏教や儒教の歴史においても独特な位置にあり、中華文明の共生性と多元的な寛容性をあらわしている。

霍童山麓の霍童古鎮は、保存が完璧で、建築もすぐれた明清の古鎮であり、文化財として価値が高い。これと古鎮が保存してきた非物質文化遺産とは、相

互補完的に価値を高めあう。霍童古鎮の黄鞠水利工事は、古代の人々の自然保護と自然利用および自然との調和がもたらした東洋的な智慧をよくあらわしている。したがって、霍童山と霍童古鎮は、人と自然とが溶け合った一つの「洞天福地」モデルを形成している。これは一種のお手本として、物質的な遺留を伝えているだけでなく、いまなお生きた存在でもある。

以上をうけて、つぎのような建議をしたい。

1. 寧徳蕉城の霍童山に対して、より深く、より全面的な、超域的な研究を進め、科学的な保護と利用規程をなるべく早く決めるべきである。
2. 洞天福地の世界遺産申請は、洞天福地という大切な遺産に対して、保護を進め、研究を促進させ、古代と現代中国をつなげる橋渡しとなる重要な行為であり、霍童山は第一洞天としてこのプロジェクトに参与しリードする要件を備えている
3. 「洞天福地の研究と保護に関する国際学術会議」を一過性とせず、学科を超えて「洞天福地」の研究と学術交流を継続的に進め、洞天福地の文化的な内容と歴史的な背景をより深く理解・定義し、学術成果をつみあげて、「洞天福地」学の学科的な発展を進める。
4. 洞天福地の各遺産地の系列的な研究課題をたちあげ、各地の洞天福地遺産地の歴史と現状はもちろん、洞天福地の継承者としての教団と活動の保護について、文化財調査と考古学調査をおこない、空間的な発展史の研究・非物質文化遺産の伝承研究・文化遺産の価値と自然遺産の価値・洞天福地保護と地方民間経済の協調的な発展などの系統的な研究を進める。

2019年6月23日　　（土屋昌明訳）

（以下、参加者署名）